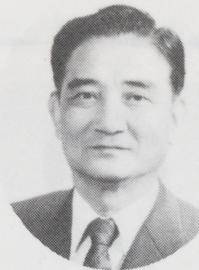


卷頭言



21世紀へ向けての生産技術

ヤマハ技術会顧問
福田 雅彦

90年代への積み残しを避けるかのように、内外にわたる政治の激動が走り抜け、地軸を大きく揺り動かした。新たなバランスを模索する過程では、経済力とこれを支える技術力が、グローバルな力関係を支配して行くであろう。壁が崩れたあと、突出した日本の経済力は、更にくっきりと浮かびあがることになろうが、国際的な共存、支援のスタンスを誤ると、目障りな突起として削り捨ての集中攻撃を浴びるのは必至である。

新しい世紀に向けて、日本人の意識が、経済大国から生活大国への助走を始めたことは紛れもない流れである。自由な思考や行動が人間らしい快適さを求めて、生活をますます多様化し、個性化のテンポを速めるであろうし、精神的豊かさをも追うことになるであろう。消費の動向は、造る側や売り手の仕組んだメニューよりの選択から、楽しさや意外性を求める個性的需要へのシフトが更に進むであろうし、高度情報化社会の中では、その消費感覚は、ますます鋭くならざるを得ない。

このような潮流の中にあって、お客様の感性に刺激を与えながら、個性化し高度化する要求を満足する商品、サービスの提供にこぎつけるのは容易な事ではない。ここには限界を見きわめることの出来ない投資が発生する。

その流れの中で製造部門はどのように併走するのであろうか。仕事中心から人間中心へ、働く人を大切にする姿勢は更に強まり、快適な作業環境づくりへの関心をますます高めながらも、ブルーカラー離れは間断なく進んで行くであろう。これは合理化とは異次元の、人から機械への交代を問答なしに促すものである。また最近の加速度的な部品技術の高度化は、既に電子部品の一部に見られるように、人手による組立作業を絶対的レベルで不可能にしつつある。これらに併う設備投資は、新しい評価視点に支えられながらも、経営的にはコストの体系を大きく揺さぶるものである。

次世紀に向けての消費動向の変化を考えると、多種小量生産への対応に向けて原点移動を続いている間に、いつの間にか限りなく個別受注生産に近づいているであろう。“安く、早く”は当り前の要素として埋没しつつあるが、この生産形態での無人化、即納化が住宅産業では今現実のものとなりつつあるように、形を変えて再び我々の眼前に立ちはだかるに違いない。

この時点では、お客様のわがままいっぱいの要求仕様を受けて、設計、生産、コスト、納期が一元的に結合出来るシステムが構築されていてお客様に即答出来る体制が必要となっている。生産管理に人手が介在する余地も殆んどなくなっているであろう。

新しい世紀に向けて、これらの問題をとりあげていく生産技術を考えると、何やら復素平面のイメージと重なり合う。困難ながらも何とか実軸上で議論してきた投資基準が、虚軸にしか投影出来ないような新しい投資対象によって侵食され始めているのである。この10年の助走期間、如何に新しい波動を実数化し、それを含んだ価値の体系を築きあげるかが、20世紀のアンカーを務める我々に課せられたテーマであろう。